『成安造形大学紀要』第 14 号（2023 年 3 月 31 日刊行）

現代芸術と SDGs（持続可能な開発目標）をめぐる覚書

An Essay on Contemporary Art and the Sustainable Development Goals (SDGs)

千速　敏男
CHIHAYA Toshio

現代芸術と SDGs（持続可能な開発目標）をめぐる覚書

An Essay on Contemporary Art and the Sustainable Development Goals (SDGs)

千速　敏男
CHIHAYA Toshio
教授（西洋美術史）

Professor Toshio TAKEUCHI regarded the modern age as an age when “usefulness”, which is just a relative value, was placed on par with the absolute values of truth, goodness, and beauty. As a result, *ars* (art) has diverged between “technology”, which produces usefulness, and “fine arts” which produce beauty. However, putting “sustainability” in place of “usefulness” would provide a new potential for contemporary art to contribute to society.

東京大学で美学を講じていた竹内敏雄は、定年による退官後の1967年、『現代藝術の美學』（東京大学出版会）を発表しました。竹内は『アリストテレスの芸術理論』（1959年，弘文堂）で日本学士院賞を受賞した古典学の権威でしたが、同時代の芸術にも強い関心をいだきつづけていたのです。

竹内が著した『現代藝術の美學』は、すでに半世紀も前の思索ではありますが、今日においてもなお、現代芸術のあり方を考察するとき、きわめて有益な示唆を与えてくれます。本稿では、竹内の『現代藝術の美學』を出発点として、現代芸術が社会に貢献する可能性を考えてみたいと思います。

古代ギリシアを代表する哲学者アリストテレスは、人間の活動形式は「観る（theorein）」、「作る（poiein）」、「行う（prattein）」の３つに集約できると考えました。ギリシア語のtheoreinは英語のtheory（理論）、poieinはpoem（詩）やpoet（詩人）、prattenはpractice（実践）の語源になっています。竹内は、アリストテレスの考えた３つの活動形式を、真・善・美という３つの絶対的な価値領域と関連づけてみました。すると、図１のようになります［註1］。竹内は、美と善の間に「作る」ことができ、「行う」ことができる価値があると、図式がきれいにまとまることに着目しました［図2］。

［註1］竹内敏雄『現代藝術の美學』東京大学出版会，1967年，65ページ掲載の図式を改めました。

そこで、竹内は、同時代の芸術活動のありかたを鑑（かんが）み、「有用性」という価値を考え、あてはめてみました［図3］。ただし、「有用性」は、真・善・美とは異なり、絶対的な価値ではありません。相対的な価値です。たとえば、学問においては真か、偽か、いずれかしかありません。善と悪、美と醜も、そのような絶対的なものです。しかしながら、有用性は、たとえば「この新製品は旧来の製品より20パーセント性能が向上した、つまり有用性が増した」と述べることができるように、相対的な価値にすぎません。絶対的な価値ではないので、これまでの長い歴史のなかで、有用性が真・善・

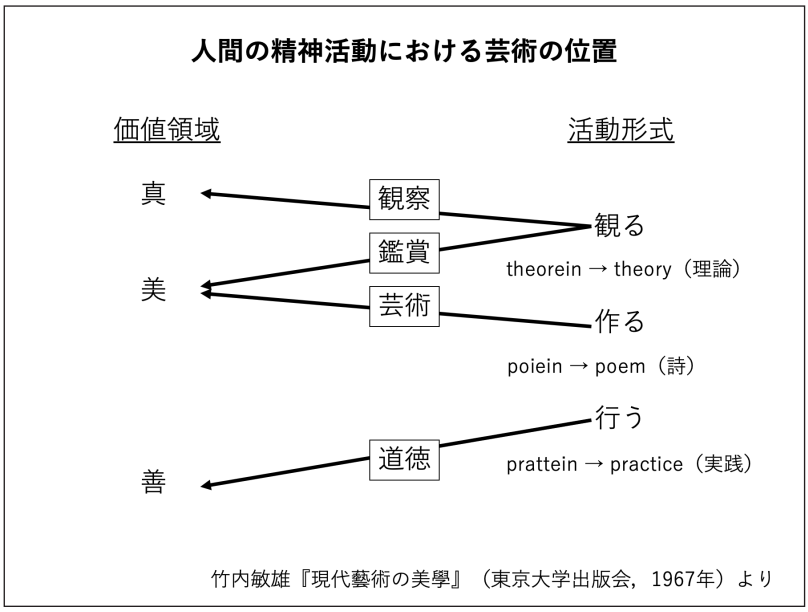

図 1

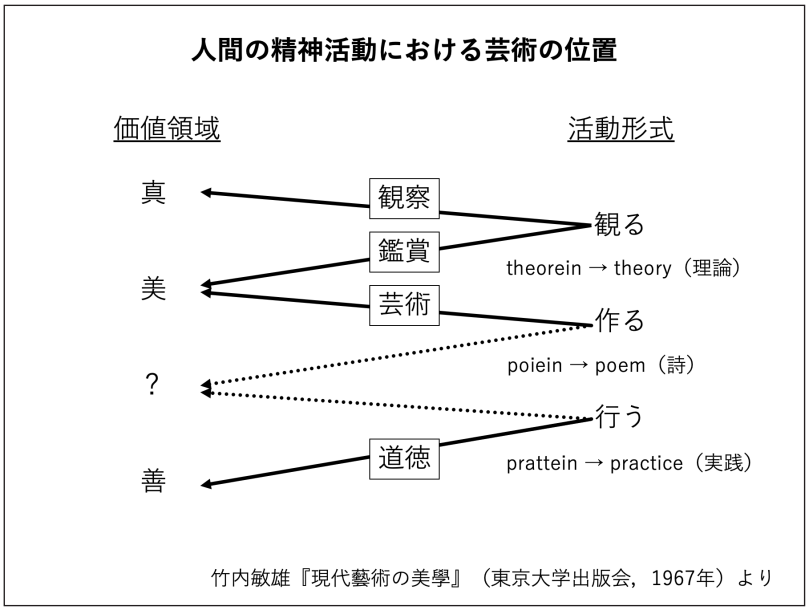

図 2

美とならんで扱われたことはなかったのですが、この有用性をあてはめてみると今日の芸術活動のありかたを説明できると竹内は考えたのです。

図 3 にあるように、わたしたちは有用性のあるもの、つまり役に立つものを「作る」こと（技術）もできますし、役に立つことを「行う」こと（労働）もできます。有用性を図式のなかにあてはまると、価値領域と活動形式がきれいに関連します。

有用性を価値領域にあてはめると、図 4 にあるように、「作る」という活動領域は、「芸術」と「技術」に分かれます。英語では、ラテン語の ars に語源をもつ fine arts で「芸術」を表し、ギリシア語の thechne に語源をもつ technique などで「技術」を表しています。

しかし、本来、ラテン語の ars には「芸術」と「技術」の両方の意味が含まれていたのです［図 5］。今日の英語の art にも「技術」という意味は残っています。たとえば、the art of making fireworks

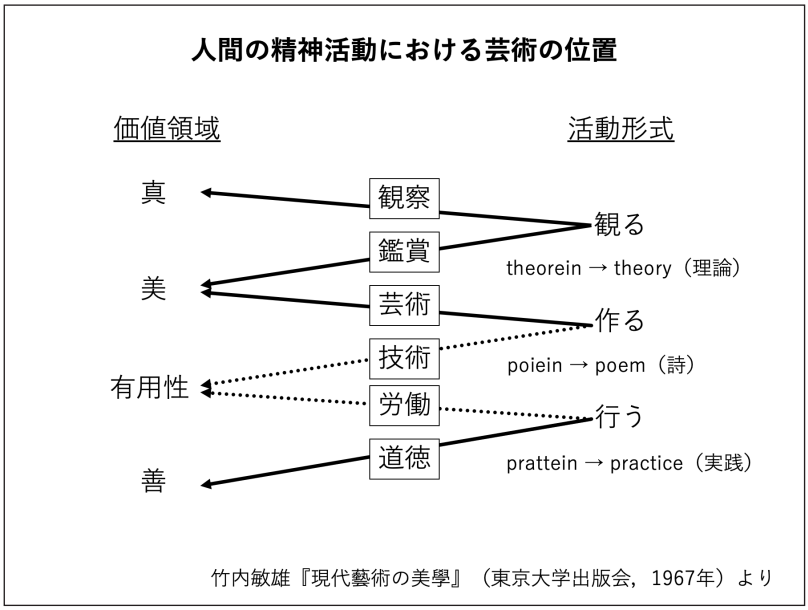

図 3

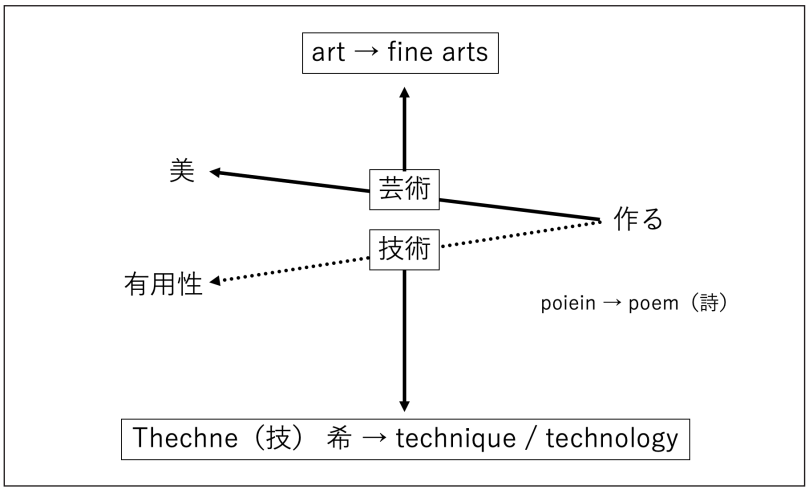

図 4

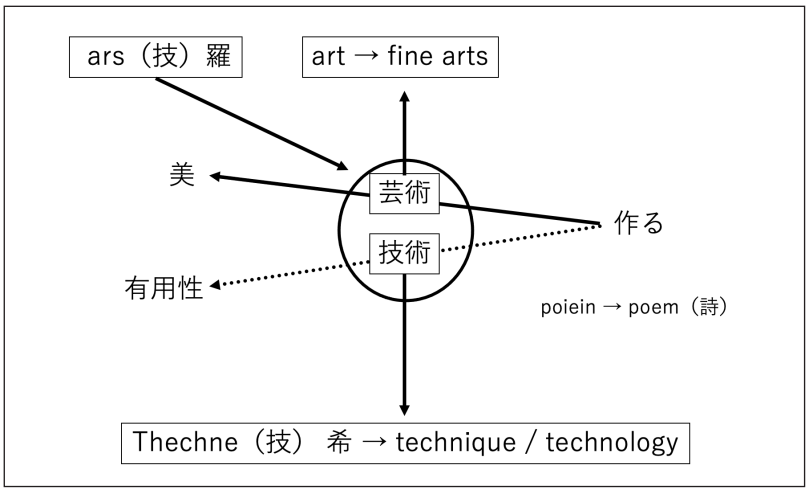

図 5

は、「花火のつくる芸術」ではなく、「花火をつくる技術」です（蔡国強を思い浮かべる必要はありません）。したがって、美を「作る」ことを「芸術」、有用性を「作る」ことを「技術」と分けることは、ラテン語のars（技）を「芸術」に矮小化してしまうことになります［図6］。

デザインは、有用性をめざして作りだされた製品に美しさという価値を付加する造形活動として19世紀後半の英国で生まれました。いちはやく産業革命を達成した英国では、工場制機械工業により大量に製品が生産されるようになりましたが、産業革命以前の家内制手工業のもと、職人の手によってつくりだされていた製品に比べると、たいへん粗悪なものでした。工場制機械工業によって大量生産される製品の粗悪さを解消すべく、ウィリアム・モリスはデザインという新しい造形活動をはじめたのです。これは、ラテン語のarsが本来もっていた「技」の復権といってよいでしょう［図7］。

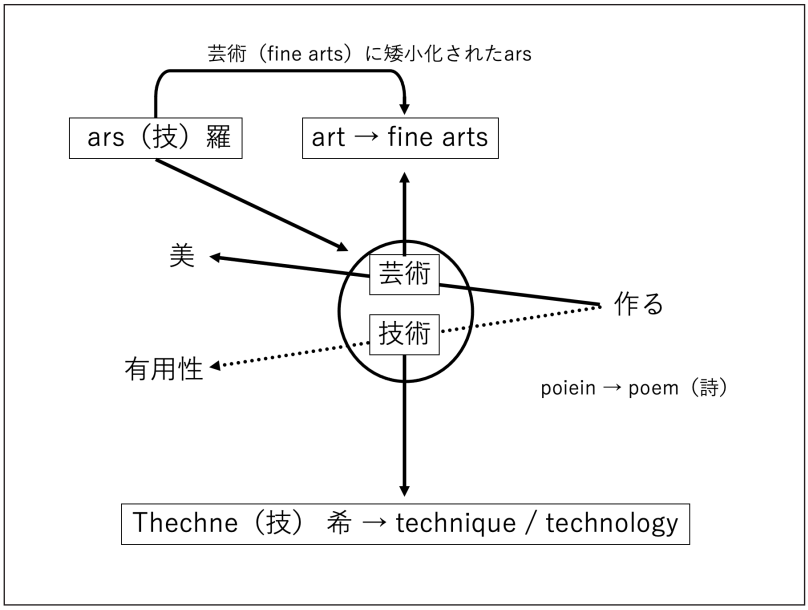

図6

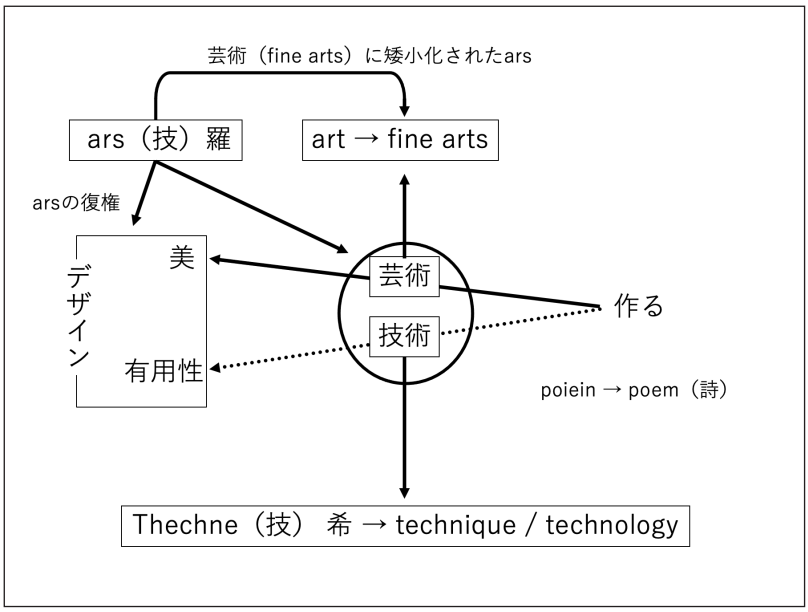

図7

「近代（モダニズム）」という枠組みのなかで考えるのであれば、デザインという造形活動の登場をもって一区切りつけてもよいかもしれません。しかし、芸術と技術の乖離は、デザインの登場によって解消されたわけではありません。デザインという造形活動は、美と有用性という二つの価値の緊張関係のなかで営まれなければならない宿命を負っています。「有用なものは美しい」という機能主義によって、この緊張関係は緩和されているだけなのです。

竹内敏雄が『現代藝術の美學』を発表した1967年には、すでにポスト・モダンの動きが起こっていました。わたしたちは、竹内の示唆を糧として、さらに考えをすすめていかなければなりません。

有用性という価値領域が近代（モダニズム）を特徴づけるものだとすれば、ポスト・モダンな今日の価値領域は、有用性ではない別のなにかということになるでしょう。たとえば、神中心の世界観であった西洋の中世であれば、「聖」という価値があてはまりそうです［図8］。西洋の中世においては、美しいものをつくることも、聖なるものをつくることもars（技）でしたし、善をおこなうこと（道徳）と神に祈ること（信仰）も重なりあっていました。

では、ポスト・モダンの今日においては、どような価値領域が考えられるのでしょうか。パフォーマンス・アートという造形活動も生まれていますので、現代の芸術の活動領域は「作る（poiein）」にとどまらず、「行う（prattein）」にまで拡張されていると考えられます［図9］。第二次世界大戦後の現代芸術においては、諸流派・運動の名称に「〇〇主義」ではなく、「〇〇アート」が用いられることが多くなりました。これは、ひとつの「芸術（アート）」のもとでのさまざまな「主義」ではなく、「芸術（アート）」そのものの多様化を意味するのでしょう。

筆者は、有用性に代えて「持続可能性（sustainability）」を考えてみたいと思います［図10］。「持続可能性」は、2015年の国際連合総会で採択際された「持続可能な開発目標（Sustainable Development

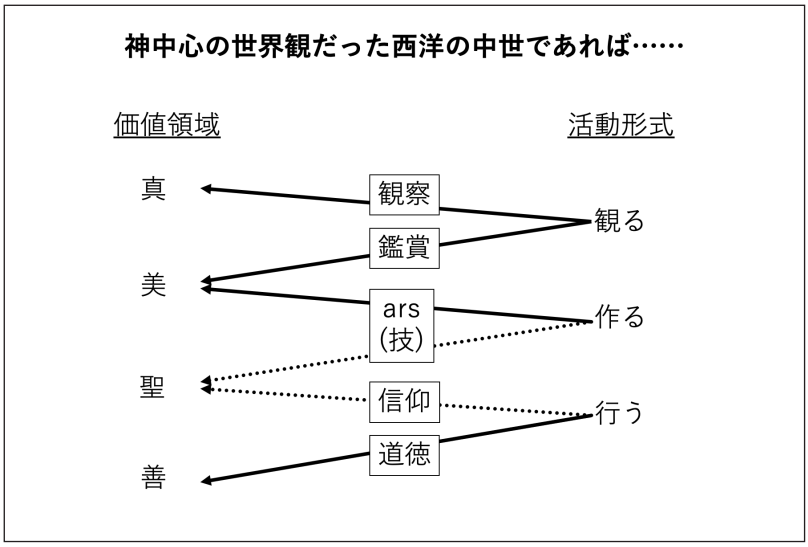

図8

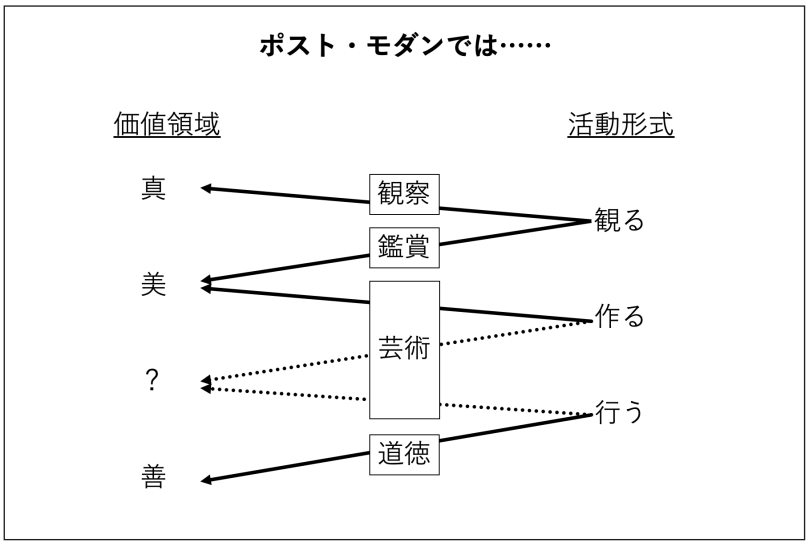

図 9

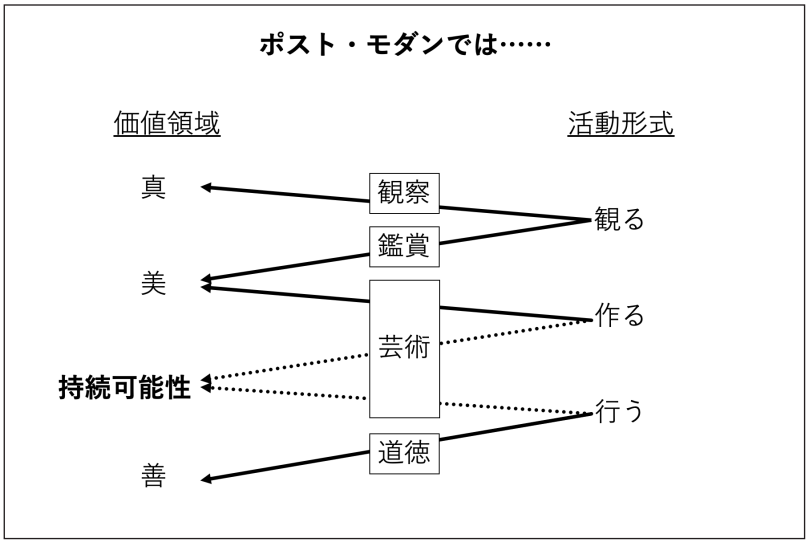

図 10

Goals: SDGs)」の基盤となる価値です。事実、多くの芸術家たちがSDGs に強い関心をいだき、芸術による地域振興を試みています。

有用性が相対的な価値であるのに対して、持続可能性は絶対的な価値に準ずると考えてもよいでしょう。というのも、持続可能性が確保されなかった場合、わたしたち人類は滅亡の危機に立たされるからです。

たとえば、2022 年 6 月、デンマーク工科大学には「絶対的持続可能性センター（Centre for Absolute Sustainability)」が開設されました。センター長を務めるマイケル・ツヴィッキー・ハウシルト（Michael Zwicky Hauschild）教授は、以下のように述べています。

> 長い年月をかけて、わたしたちは、持続可能するためには最適化するだけでは不十分であると学びました。たとえば、わたしたちはガソリン車やディーゼル車を改良し、1 リットルの燃

料でより長く走れるようにしました。しかし、持続可能性の絶対的な目標が、二酸化炭素を排出しない「気候中立」である以上、化石燃料で走る内燃機関は決して持続可能な解決策ではありません。

ですから、わたしたちは、絶対的な意味で持続可能である可能性を持たない技術を改良する努力をしてきたのです。まちがった技術をまちがっていないものにするのではなく、電気自動車や水素自動車など、絶対的に持続可能な技術をみきわめて、それを発展させていくことが必要なのです［註 2］。

［註 2］Michael Zwicky Hauschild. Questions about absolute sustainability. Centre for Absolute Sustainability（Technical University of Denmark）https://www.dtu.dk/english/news/all-news/questions-about-absolute-sustainability?id=c6289831-2750-4f12-aeca-1adde7bfb25a（2023 年 1 月 10 日閲覧）

ここでは、技術のめざす方向が有用性から持続可能性に転換され、さらに「絶対的な意味で持続可能である（sustainable in an absolute sense）」ことが強調されています。

技術のめざす価値が有用性から（絶対的な）持続可能性に変わるとき、技術と芸術はふたたび親和的な関係をむすぶことが可能になることでしょう。

有用性をめざして作りだされた製品に美しさという価値を付加する造形活動である近代デザインにおいては、「有用なものは美しい」という機能主義が生みだされました。今日の技術が持続可能性を求めるとき、わたしたちが営むべき今日の芸術は、「持続可能なものは美しい」という新たな方向性を探究すべきなのです。

2022 年 8 月、「持続可能的なものは美しい（Sustainable is beautiful）」というプレスリリース［註 3］が、「HOUSEFUL」というプロジェクト・グループから発表されました。このプロジェクトは、欧州連合（EU）の Horizon 2020 research and innovation program（Horizon 2020 研究・イノベーションプログラム）から助成金を受けたもので、「HOUSEFUL: Innovative circular solutions and services for new business opportunities in the EU housing sector（HOUSEFUL：EU の住宅産業における新たなビジネスチャンスにつながる革新的な循環型ソリューションとサービス）」（助成金契約番号：776708）［註 4］といいます。

［註 3］Selene Verri. Sustainable is beautiful. HOUSEFUL. https://houseful.eu/news/sustainable-is-beautiful/（2023 年 1 月 10 日閲覧）

［註 4］Research & Innovation Projects relevant to the Circular Economy Strategy CALLS 2016 - 2018: HORIZON 2020. European Commission（date: 11/02/2019）https://research-and-innovation.ec.europa.eu/system/files/2020-11/h2020_projects_circular_economy_2016-2018.pdf（2023 年 1 月 10 日閲覧）

このプレスリリースの冒頭で、筆者のセレネ・ヴェッリ（Selene Verri）氏は、「建築における美しさが高価なものであることが多いのに対して、持続可能性は手頃な価格で広く普及するものでなければなりません。これは、持続可能性が対立しているということなのでしょうか？　それとも、一方は他方を統合することができるのでしょうか？　解決策は存在します。必要なのは、文化的な革命です。」と問いかけ、持続可能性を探究するイタリアの建築家、マリオ・クチネラ（Mario Cucinella）氏［註 5］の言葉を紹介します。

［註 5］Mario Cucinella Architects. https://www.mcarchitects.it/en（2023 年 1 月 10 日閲覧）

おそらく、「新しい美」とは、持続可能性についてものがたるものなのでしょう。つまり、それはもはや単なる趣味や美学の価値ではなく、まさに内容の価値なのです。

「有益なものは美しい」という機能主義が建築の分野から生まれたように、「持続可能なものは美しい」という新たな方向性が、今まさに建築の分野から生まれつつあるようです。

2020 年 9 月、欧州連合のウァズラ・フォン・デア・ライエン欧州委員会委員長は「New European Bauhaus（新たな欧州のバウハウス）」［註 6］という構想を発表しました。この構想においては、「beautiful | sustainable | together」というキャッチコピーのもと、「美」は以下のように定義されます。

［註 6］New European Bauhaus. European Union. https://new-european-bauhaus.europa.eu/index_en（2023 年 1 月 10 日閲覧）

美とは、以下のような場所、実践、体験のことです。
芸術や文化に触発され、機能性を超えた需要に応える豊穣さ。
自然や環境、地球と調和する持続可能性。
文化、分野、性別、年齢を超えた対話を促す包括性。

「豊穣さ（enriching）」、「持続可能性（Sustainable）」、「包括性（Inclusive）」を中軸とする新たな美学が生まれつつあります。この新たな美学に対して、半世紀前に竹内敏雄が提示した図式は、いまなお示唆に富むといえるでしょう。

【追記】

紀要の編集にあたり、編集委員のおひとりから、以下のご意見をいただきました。

価値領域の概念としては、「有用性」に比べても「持続可能性」はやや抽象度が低い気がします。「正義 justice」などがふさわしく、その中心的で時局的な概念として「持続可能性」や「包摂性 inclusive」などが浮上するということなのではないでしょうか。

たしかに、NHK でも紹介されたハーヴァード大学のマイケル・サンデル教授に代表されるように、今日、「正義」の新たな価値づけが重要な課題になっています。ウァズラ・フォン・デア・ライエン欧州委員会委員長の提唱する New European Bauhaus も、「正義」の新たな価値づけのひとつといえるのでしょう。

そこで、本稿でおこなったような「芸術」を拡張する図式ではなく、「善」という価値領域のほうを拡張し、「行う」だけではなく「作る」こともできる新たな「正義」に置き換えることの可能性も、探ってみることができるかと思います。

しかし、その場合は、「芸術」あるいは「ars（技）」と「道徳」との関わりを問い直すことだけでなく、おそらく、今日、新たな価値づけが試みられている「正義」と、ヨーロッパの中世における「聖」との関わりをも、問い直さなければならないように感じられます。

今日の国際的な政治問題のいくつかは、新たな「正義」と古いヨーロッパ＝キリスト教的な「聖」との（多くの場合、偶発的で無自覚な）関わりに端をなしているのではないでしょうか。

本稿は、「有用性」に代わる価値領域としての「持続可能性」について美学の立場から考察するにとどめました。「有用なものは美しい」という機能主義ではなく、「持続可能なものは美しい」という新たな芸術観が生まれることを期待しています。